埼玉大学紀要　教育学部，56(2)：21～36(2007)

植民地台湾における戦時下の玉川国民学校と平和国民学校の教員の意識と実態

新井　淑子*

キーワード：植民地教育、植民地台湾の教員、玉川国民学校、平和国民学校

はじめに

植民地台湾の1895年から50年に及ぶ統治政策の実施上、重要な役割を担った教員は学校教育、社会教育に日夜邁進し、特に風俗習慣の「同化」、皇民化に邁進していた。1938年前後から1945年前後の大東亜共栄圏構想による皇民化政策を強力に推進し、改姓名や台湾人への徴兵令実施や初等教育の義務化等が実施された。

台湾も戦争で街や民家が焼失し学童疎開が実施された。植民地下の男教員が兵役に就き教員不足は深刻であり、従来の日台の中等学校卒前後から臨時教員養成講習や資格向上の夏の講習を受け、教員検定試験を受け「助教」から正規の教員となっていた。また高等小学校卒で独学で教員検定試験に合格した教員(高雄市張自流)もいたが、半年間の講習を受けて教壇に立っていた（嘉義市の林連山)。このような状況の中で嘉義市玉川国民学校と高雄市平和国民学校の実態や若い教員の実践や植民地教育をどのように認識し、実践し推進したのか否かについて聞き書きを基に明らかにするのが、本論の目的である。

教員に関する先行研究のうち台湾の第三高等女学校卒の女教員養成・長期勤務の傑出女教員の意識や実態を聞き書きも交え丹念に資料を収集した実証的な歴史研究を游鑑明は『日拠時期培養台籍女教師的揺籃—台北第三高等女学校（1897～1947）—』（『日拠時期公学校女教師的揺籃　台北第三高等女学校』）を発表している。さらに「受益者か、それとも被害者か‥第二次世界大戦時期の台湾人女性（1937-1945)」（『戦争・暴力と女性』吉川弘文館）の研究がある。また中央研究院近代史研究所発行の「口述歴史叢書」の「人間訪問記録49」には許雪姫らが公学校女教師唐楊鴛鴛に言及している。游らもまた「同52」で、公学校教師を経て議員や婦女会で活躍した林蔡素女･陳愛殊女の聞き書きを出版している。日本では、山本禮子『植民地台湾の高等女学校研究』で女教員張瑞妍の意識や生活等に言及している。同様に広谷多喜夫の「日本統治下の台湾における公学校教育—日本人教師からの証言による構成—」（『釧路短期大学紀要』第13号1986年）や前田均「資料　日本統治下台湾の藩童教育所女性補助教員からの聞き取り」（『天理大学学報』第183輯1996年）があり、それらは貴重である。

拙論「植民地台湾の女教員史」が（『埼玉大学教育学部紀要』2001～06年までに6回）や「植民地台湾の戦時下の女教員の意識と実態」（国立台湾大学東亜文明研究中心国立台湾師範大学教育学系他略『東亜伝統等家庭教育興家内

* 埼玉大学名誉教授

秩序』2005年）がある。本論は、上記の紀要に連載した拙論「植民地台湾における女教員史」同（2）～（6）に継続するものである。

玉川国民学校と平和国民学校の母体は、共に国語伝習所であるが、1887年の公学校令によりそれぞれ嘉義公学校（32年度より玉川公学校、41年度より玉川国民学校）、打猫公学校（高雄第一公学校、平和国民学校）と名称を変更して、嘉義市と高雄市の中心校として位置付き、その役割を果たした学校である。玉川公学校に北海道から出向した五十嵐千代次は、校長から「台湾で２番目」に古い学校と聞く。[1]

なお両校では、共に戦後日台の教師と日台在住の卒業生との交流があり、玉川公学校と玉川国民学校は「玉川会」、平和国民学校は「一公会」を組織している（いた）。[2]

研究対象である嘉義市や高雄市等は台南州の主催の助教講習会で資格の取得に励んでいた。高等科卒の教員も共に働いていた。

Ⅰ　台湾教育界の動向

教員にとって1940年は、歴史的な年であった。「教育勅語渙発五十年記念式典」やそれに「記念紀元二千六百年奉祝　全島教育者大会その盛大な記念行事（台湾総督府や台湾教育会主催）があった。その上台湾総督府国民精神総動員本部から「国民精神総動員実践項目竝に徹底方策」が発表され「皇国精神の透徹」「戦時意誠の徹底」「興亜生活の推進」を挙げ、教員は「指導者の教化」やその「錬成」の徹底[3]で国民精神等の講習会が延長（69日）され、受講者を拡大していく。

総督府は、さらに同講習会を「各州庁主催」として「州は各２回、庁は各１回」の開催を計画させ「講師１名を派遣」した。その目的は「日本精神の真義竝に其の教育上の実現に就き十分なる把握をなさしめると同時に、現下非常時局と本島の特殊事情に対応して必要なる識見と実力とを得しめ、以て地方教育教化の推進力」と、教員を位置づけ、植民地の教員の任務を明確にした。その推進者は小公実業補習学校教員が対象である。[4]

同年の８月の橋田文相は文教に関する談話（「国体の本義を明らかにし、国体の精華発揚を期」し「自我功利の思想」排除、「国家奉仕を第一義とする国民道徳の確立を期す…科学の真諦を普及発展」、「国家奉仕実現の実践的基礎を確立」）を発表した。その体得には「研究と工夫」した教育実践が今後の「台湾教育」の「中心問題」であると、台湾教育で述べている。[5]

同年10月31日には台湾教育界主催の「教育勅語渙発五十年記念紀元二千六百年奉祝　全島教育者大会」（500余名参加）では、「宮城、橿原神宮に対し奉る遙拝、戦没将兵の英霊に対する感謝竝に皇軍の武運長久祈願の黙祷の後、君が代の斉唱…教育勅語竝に紀元節に渙発せられたる詔書を奉読」等があった。次に文政局の「国防国家建設を目標とする国策に対応する為め本島教育上努力強調すべき事項如何」の諮問の答申が各学校種別に発表された。さらに大会宣言と時局の認識と戦意昂揚を決議した。[6]

初等教育の「馬公第一公学校」の答申では、「教員不足」「教職員の質の低下」「師範入学者希望者の激減」対策は「教育」の増大と「給与」の「優遇」にあり、それが諮問の国策に添う「本島教育上努力強調すべき事項」であるとしていた。[7]

同年11月には41年度実施の国民学校制度講習会[8]があり、その本質は「皇国の道の実践行にまで高まることが皇国の道に則ること…。教師自身が先つ学と行との一体（し、それが）自己確立の根本問題」であり「師弟同行」である、とした。[9]　翌1941年12月には太平洋戦争が開始したが、国民学校の教員は学内や講習会等で多忙な日々を送る。

1940年度には1943年度の公学校の義務制に備え、新竹と屏東に師範学校が設置され台湾内に師範学校は６校に増加した。[10]　また、同年５月には台南師範学校に急遽女子講習科が設置さ

れ[11]、教員養成数が2千名を越えた。翌41年度には国民学校令が施行されたが、それに伴い台湾の師範学校は「師範学校公学師範部、小学師範部の別がなく」なった。[12]

1943年には師範学校が専門学校に昇格し修業年限が1年延長されるため、卒業生が出ないので女教員を養成して、その穴埋めを実施する。同校の女子は2年から3年制となったが、非常時で「当分2年間に短縮」された。台湾では台北第一と台北第二師範学校が統合し、台北第一師範学校となり、同女子部本科生は1944年度から定員は急遽3倍の「120名」に急増したのは「学徒出陣、徴兵検査」が男子にあり「1年引き下げ」られたのであろうか。[13]

この間の教員補充を見ると1942年は教員が「1800名」増である。その補充は1402名（「師範」卒「800名」「各州委託の臨時教員が300名」「内地から302名」）を決定したが、不足分は高女卒、中学校と高等科卒で補充する[14]、という。それでも不足した前（1941）年10月には、「国民学校高等科修了以上の学力を有する者（男女を問はず）」の300名を対象に6か月間の「臨時教員講習会」を開催し、その最終日に「臨時教員検定試験」をして、合格すると「国民学校初等科準訓導免許状」が取得出来る。合格者は「昭和17年3月31日付で助教に採用」という条件である。それは5市（「台北、新竹、台中、台南2教室、屏東」）で「台湾総督府委託臨時教員養成講習会」として開催された。[15] 同年の夏休みには各種講習会が開催されたが、30日間の「小公学校教員資格向上講習会」は、現職の教員対象（小公学校専科訓導、準訓導、教員心得）として実施され「小本正」「乙本正」の資格は講習で試験に合格すると取得できたのである。100名弱（台北、台中、台南は各20、新竹、高雄が各15、花蓮港庁4、台東1、澎湖島2名）資格をとったようである。中学校や高女卒青年学校、高等小学校卒の教員心得や助教（43年度から）たちは、例年この講習を受けて訓導になった例が多い。[16]

戦時下の教員不足は「時勢に気の利いたものが教員なんかになるものか」という、「教育者の世論」は「教育者たるの自覚を忘れた妄言」と、いわれた。[17]

また、例年の如く渡台教員を対象に台北、台中、台南で1週間の「新渡台教員講習会」、小公学校教員を対象とした5日間の体操講習会（男子105、女子56名参加）、上席教員を対象とした「国民精神の高揚と教育者としての信念を確立」し「非常時局下」の「初等教育者の志気を」高める講習が7日間あり、校長等100名が参加している。[18]

しかし1944年になると米軍機が台湾の主要な戦時関連ある郡や市を爆撃し疎開が開始された。同年10月以後から高雄には「米軍艦載機の空襲が毎日のようにあり、授業は半どん状態で、45年3月には旗後（半島）の住民は強制疎開となった。平和国民学校は、寿国民学校（寿山下）に疎開はしたが、先生方もばらばら、子どもも来ないので授業どころではない状態」が続き、町や学校は一部を残して焼失した。[19]

嘉義郡民雄では、45年3月13日は「B24　2機」、5月11日は「焼夷弾」で被害を受けた。嘉義市では44年末から11時になると空襲警報で「部分疎開」となり、それが「全面的疎開」を開始したのは、「45年4月3日」である。当日「焼夷爆弾が2」個投下され市内の半分を焼失し、生徒も学校に来なくなって、教員も疎開者がでた。嘉義郡市では家族で教員も多く生徒も疎開し殆どいなかった。また、45年3月初旬には「基隆」にも敵機襲来」し「5月31日には台北大空襲」となり「警報」や「解除」がその後も繰り返された。[20]

教員の兵隊もポツダム宣言を受託し玉音放送以後、学校にもどったが、日本の教員たちは自然退職や僅かの教員が学校に残り21年の引き上げを待っていた。その間の生活、生きるための日々の苦悩と生徒との別れがあった。

このような状況で「忙しい先生達」は、「時局時局という叱咤に追われて…大切であるべき

児童の教育を忘れて、次第に児童の魂に食い入るような迫力のない、機械的な即頭式な事務やに自らなり下」がった[21]、という。

本論の対象校である両校の1944年度の教員は玉川国民学校は、嘉義市玉川町2310にあり、初等科39学級、高等科２学級があり、学校長は児玉乙三郎と教員は42名（訓導は30名―男21・女９―、助教12名―全員女―）である。同年の平和国民学校は、高雄市平和町2819にあり、校長は横山農夫志である。同校の教員は37名（訓導27名―男24、女３―、準訓導女１名、助教９名―男１、女８）である。[22]

Ⅱ　玉川公学校から玉川国民学校へ

1　玉川国民学校の概観

台湾では三大節と「始制記念日」には、判任官の教員は、勲章をつけ文官服を着て「肩章つけ」た「正式の服装」をした。しかし教育行政官から校長に就任した某校長を生徒たちは「あ、今度の校長先生勲章下げてない」と「びっくりし」ていたことがあった。[23]　この校長は1938年に校長室に神棚を設置し、日本人の女教員にはその当番があった（後述）。

児玉校長は会議で自ら発言中に読書中の教員のところに来て「パン、パン顔を叩いた」。[24]

玉川の特色は、駅員がホームで連絡しあうのをヒントに「午後３時に立会」を設置し「全員招集」した。立会は「本日の注意」や「校長先生からと学年間の話」がある。何もない時は「そのまま解散」したが、普段は「５分位」かかった。立会は「課外授業」中でも中断して「職員室」に行ったが、戦争が激しくなるまで続けた。

玉川では、隣接した嘉義高女補習科生の教育実習生を「家弓武千代と樋口先生」が例年「担当」した。[25]

若い先生同士での交流は「ほとんど、なかった」が「内地から来た先生方同士は互いに行き来」していた。[26]　日本から来た教員が中心に教授法の研究に情熱をかけていた教員がいて、研究熱心な平良や山下二人等は国語教育（日本語）を研究していた。同校の台湾教育刷新同盟は、岩本文治も小倉、山下も知らなかった。[27]

2　日本人同士の違和感と女教員

日本から来た教員や日本の中学校卒で台湾の師範卒は、台湾生まれの「湾生」と台湾人に対する見方や日本人同士でも「湾生」を一段と下に視ていた教員が多かったようである。同校の中畑文子（現熊谷）も同様に感じた。[28]　玉川では、台湾生まれの男教員は岩本一人であった。「同じ日本人でも」「君は湾生かって、ちょっと軽蔑する。特に内地の中学校出て台湾の師範に来た人なんかですね。湾生がどこが悪かとか思って。内地から来た先生は自尊心を持っとるかなんか知りませんが。『なんや、君は湾生か。って馬鹿にしますの。』某教員は「剣道が強かったし軍隊は海軍で鍛えられた…短期兵役も…海軍には少ないですけど」、と。[29]

岩本は、台湾人と対等に関わっていた。戦後日本に来た「同級生が、飲む会」の時岩本の耳元で、「台湾語で、がんぷん（岩本の台湾語読み）だけな、俺たちを差別せなったのは」と、言った。

若い女教員の中には低学年担任で嘉義高女出身の日台の６人組と自称して映画もデパートも食事も一緒、仲良しグループがあった。何かあると集まって話し合い校長室にも「全員じゃなくて」「二人で行ったり、抗議をしに」いった。

「一視同仁」といった某校長が朝礼で「チャンコロ」と言った。その場で台湾人の女教員がすごく怒った。すると校長室に呼ばれた。馘首されると覚悟して校長室に行くと校長は「僕が悪かった」と謝った。６人組の１人である女教員は、それ以来この校長を尊敬している、と。

玉川には1936年４月の高野校長以来校長室に神棚があり、日本人の女教員が当番で毎朝掃除

をした。転入してきた高学年担任の中畑澄江が当番時に校長室に花を活けた。それを6人組の日本人の女教員が「あんたは生意気だ…校長先生のご機嫌ばっかとって…（花を活ける等）何であんたに変わっちゃったのよ」と怒られた。姉の中畑文子（師範卒）の嘉義高女の同級生達（高女卒）である。花代は自腹なので校長の「機嫌取ったと思われても仕方が無い」。

中畑は、学年が違ったので台湾の先生と話す機会はなかったが、6人組を「うらやましいと思う余裕が無かったね。呼びつけられて恐いなぁと思った」が。

しかし玉川の教員たちは「台湾の人もみんな一緒で一番年上の先生も温和な人だったから、そんなに仲たがいするような人はいない」と、中畑は言う。[30]

岩本は、6人組の存在を全然知らなかった。しかし一度写真を見せられたが、「日浅芳一さん」が写っていた、と。[31]

3　教育実践ー岩本文治ー

1）必要観から発する日本語を待つ

岩本は、2年生男子組を3年に持ち上った途中で「短期兵役」で、「台南の台湾歩兵第二連隊5ヶ月間」訓練を受け「伍長」で帰校した。玉川では、兵役を終わると教員が「バリバリしたとこで、上学年持たせる」が、岩本も5、6年（以前は2、3年）と担任した。その後1年生を担任している。

1940年度は1年生男子組の担任となり日本語のみで教育をしたのである。

嘉義市内の公学校は就学増で生徒数が増えた。玉川公学校では1940年は、1年生が8学級もあり「1学級78名」であった。そのうち「4～5名は幼稚園で、日本語」を習っていたが、他は日本語は全然通じない。「台湾人の先生は台湾語で言って日本語に直して」教える。岩本は師範で習った台湾語は「全然通用」しなっかった。

岩本は言語の修得は「必要観を覚えて、習得する」ものと考え「始めから日本語で教え台湾語は、全然交えなかった」。担任が台湾語をしゃべれないから子どもの方が学校生活上日々身近な言葉を日本語で発する必要性を体得する。子どもが言葉を発して伝達できる、意志の疎通が可能となることを体得させるまで「待つ」教授法を岩田は実践した。なお、この教授法は師範学校で習った教育方法ではなかった、と。

その実践の結果、22歳の岩田は生理現象の後始末を厭わずにやっていた。岩本の日本語の取得法を長いが岩本の言葉で聞こう。なお1年生は、台湾語の名前を日本語読みに教えてもらって入学していた。

授業中1年生は「せんひいや、ぱんじょ、ぱんじょ！」ってくる。「ぱんじょ。ばんは話す。じょはおしっこ。小便て言うまでは私は知らん顔してもんずけ、幼稚園出の子が「先生、おしっこ。おしっこ」って教えるのは、岩本は「止め」ないで「おしっこじゃない小便」と教える。その子は「先生、小便」って言うと「行って来い。行って来いって」。

教科書を使っての日本語の教育を岩田は、1年生には日本語は「単語」と掛図を使って教えた。「掛図を見せて…たとえば先生がおって生徒が頭下げてる図があると、その画面から想像させる。生徒が先生に挨拶しとるところとか言うて、「おはようございます。」と言葉をだんだん教えてですね。」教科書を読むのは教員が範読して、「復唱させる」。

日本語を教えるのに一番困ったのは、山下二人同様「ダ行の発音が全然ダメ」で、「泥棒が田んぼで転んで泥んこになったなんていう言葉が、ろろぼうが田んぼで、こんなして“ど”がみんな“ろ”。ラ行になりますな。泥だらけになったって、ろろららけになった。何回も反復練習ですね。」

岩本は、文体にも注目し日本語と台湾語を意識して教えた。「私は　山家に　行きました」これを台湾語では「私は　行きました　山家」となる。

1年生には「学年主任」はいたが、子どもへの教授方法や内容等についての話し合いは「めったに無かった」ので「学級王国みたい」で自由に担任が教育できた。

岩本は、低学年でも学習の遅れている子どもに「課外授業をしていた」が立会には、それを打ちきって参加した。

2）遊びを基軸

岩本の教員としての信念は師範卒業の時に教育学の先生か「服の汚れない先生にはなるな。服の汚れる先生になれ！」と「結局子どもがすがってくる」教員になれ、といわれ、それを取り入れた教育実践であった。子どもが学校は楽しいとこだと思えるように子どもたちを教育したいと、考えていた。そのために学校生活で遊びやスポーツ（相撲）を取り入れ、放課後の生徒と共に過ごしたいが、「なかなかね遊びたくても時間が取れなくて」、そこで日曜日に子どもを順番に郊外へ連れ出して、遊びながら子どもと日本語で語り、自然に触れ自然に日本語を取得し語彙が豊富になり自然に親しみ、人間的な共感ができる、異民族を越えた師弟の絆が深化されたのであろう。「日曜日には私は必ず生徒5、6人ずつ連れて郊外に遊び」「みんなを平等に連れ」出し、岩本には休養日はなかったのである。

他の郡で「万引き」した子どもが警察に捕まった。親の名前を言わないで岩本の名前を言い、岩本の家族は子どもを「ひもじか目に合わせたらいかんからって…握り飯いっぱい作って…、警察で引き受け…ひもじかったろうって飯食わした後、子どもが喜んで、喜んで」いた。

岩本は戦後「時々台湾帰っても先生は勉強教えんかったもんねぇ。僕たちと遊んでばっかり」と言われる位、師範学校の教育を忠実に実現していた教員である。

なお、同校には有矢玉枝（現佐藤、演習科卒）も「管理法」の「国府先生が繰り返し言われたように、休み時間返上で」子どもと「縄跳び、ドッチボール」等で遊ぶことを大切にした教員であった。[32]

3）オルガンの交代授業不許可

玉川では、高学年（「上学年」）の教師は、音楽の授業はオルガンが弾けないと交代していた。岩本はそれを希望したが「普段は優しい小野校長」が、上学年は難しいが「君は2年生やないか。君は若いし、低学年だから君の交代授業は認めん」、と言われた。そこで好きな「乙女の祈り」をバイエルやソナチネもやらないで独習した。

同校には、体育館にピアノがあり、金城と二人で「ピアノを奪い合い」練習に励んだ。同校の伊藤ヤヨヒ（現後藤）はピアノを目がけて走っている2人が印象に残っている。岩本は、宿直を頼まれ宿直室が「常直のように」なり、用務員が「寝静まってから」練習に励んだ。

その後岩本は、子たち達に自らピアノを弾き音楽を教えていた。

戦後岩本は熊本で模範的な合唱指導で一目おかれる存在となった。[33]

4）施設・設備等を担当

玉川公学校の正面の車回しの真正面に立つ時計台（上に照明燈がった）は、道路から真正面に見えて「玉川の一つの顔」であった。その管理を岩本は採用直後から敗戦まで毎週月曜から土曜日まで、毎朝登校直後時計台に乗って時計を合わせ、「正時に音」を調べるのが日課であった。その上に照明がついて国語講習所の夜学で学ぶ人たちの安全を見まもっていた。

家弓が設計したラジオ塔は、グラウンドに面した運動場にあった放送装置で何千人と生徒がいる朝礼は、マイクを使用して拡声しないと通じなかった。ラジオ燈は他校からも見学に来ていた。

岩本はガラス器具を持参で各組に出かけガラス修繕を担当した。大きな板ガラスを切るには技術を要すため岩本は、彼以外「器具は絶対に使わせない」で、板ガラスを切ってはめる。「いわゆる雑務も私」と岩本は言うが、大規模校で一番若い男教員だから「文句言わずはいは

い」と職務を全うした。

後にさらに「金魚漕作ったら」「フナとか金魚とか、大きな水槽が3つ並んで…鑑賞魚」の管理等が任された。玉川では余人を以て代え難い、10年間であろう。[34]

4　女教員の質の向上と使命感ー中畑澄江ー

1）教員の資格取得ー最短距離ー

中畑澄江（現岩崎）は「最短距離」をとった教員となった。嘉義高女を卒業した1941年4月からは、15日間師範学校で講習を受け「準訓導」の資格をもらい公学校に務めた。講習が一緒だったのは、「100人」か「70人位か」[35]定かでない。

李教が嘉義高女卒の教員養成の聞き書きの調査によると1941～1943年は、卒業後台南師範で講習を受けたのち教員心得で就職し「9か月後に準訓導」となり、その「半年後に正教員」となる。1944年までは、教員免許取得に関しては、上記と同様であった。それが1944年度の高女卒は、戦争激化に伴う措置かと思われるが、出身国民学校（在学中は公学校）で講習を受けた。45年卒は高女の4年の3学期を全て教員養成の講習の時間とした。1944～45年卒は、全て母校に就職した。44年度に詹雪貞は白川、45年度には鄭春葉は疎開先の竹崎、同年の母校の玉川には欧識、林水連が採用された。

嘉義中卒で郵便局勤務を経て教員なら「兵役免除」の噂を聞き頼彰能は、東門国民学校（以下東門と略記）に助教として就職した。同校には嘉義中の同級生が3名いた。ところが台湾人徴兵令第1号で招集され戦地で訓練を受け敗戦直後解除され、同校に戻った。[36]

1941～45年までの高等科卒は「郡市」の役所の所在地で開催した。嘉義郡は「朴子国民学校」、嘉義市は「白川国民学校」で講習会を受けた。

嘉義高女の卒業と同時に3月から2ヶ月間講習を受けて、各国民学校の教員になった。嘉義市内の東門には林淑慧、白川には洪清蘭、嘉義郡の民雄の母校には李教が配属されたのである。1943年の給与は日本人は60円（加俸込み）であったが、台湾人は38円であった。

それが翌1944年3月8日に嘉義高女を卒業して教員になった詹雪貞達は、同月10日から3週間の教員の講習を受けて、その最終日の31日には教員検定試験を受けた。合格者は1年間の師範学校講習科を修了した者と同等の乙種本科正教員の資格が取得できた、という。しかし就職時には、教員検定試験の合否前であるために「助教」の辞令で母校の田之頭清校長の願い通り詹雪貞は白川に採用となったのである。同年の夏休みには「台南州主催の助教講習会」に参加（「各校から4～5名」）した。詹雪貞の給与は「助教の時は28円」であったが、43年度より台湾人の教員にも訓導には加俸がついたので「訓導になって『一足飛びに』月報96円となった」のである。[37]

中畑澄江は教員になった2年後の43年に、「優秀な教員を3ヶ月師範学校で講習」を給与を貰いながら受け「訓導」になった。「嘉義市内から3人位」推薦され受講した。

中畑は受講中も5年女組の担任であったが、6年に持ち上がり高女入試に取り組む。

2）進学指導

玉川の学区は「裕福」な家庭が多く生徒数「70名近くいた半分」は受験希望者でその「内申書書くのに困った」。

例年玉川では、1つの組から2名位ずづ合格していた。中畑は子ども達の進学希望を叶えるために、毎日放課後と休みの日や空襲警報等で授業がないときには、昼間も自宅の隣の空き家の教員宿舎で学習指導をした。それを知っていたのは宿舎の隣の五十嵐教頭位であった。その結果、1944年度の嘉義高女に6年女子組で7名が合格（24回生）、台南第二高女に3名が合格した。中畑は玉川始まって以来の快挙であろう。

家政女学校には日本人がいないため台湾の子どもが何十人も入れた。しかし戦後になって生徒から「他の組から誰も」高女に合格しなかった、と中畑は聞いた。その要因は、低学年から

日本人の担任であり「優秀だった、良い子はいっぱいいた」と言う。中畑の取り組みと母親の応援や協力であろう。

中畑を女教員として成長させる基礎を身に付けた公学校の指導を見よう。他の女教員や長瀬百合子（後述）にも見られる指導である。

3）学内外での女教員の質の向上の取り組み

六寮公学校の清水豊校長は、1941年度から中畑を採用したが、念願叶っての日本人の女教員であった。中畑の教員宿舎は門構えの校長と教頭の間にあり、食事や風呂も校長宅や教頭宅でとるので、一緒に採用された男教員（長屋住まい）が羨ましがるほど優遇された。六寮には代用の女教員が多く国語講習所で教えていた台湾の女教員が3～4名いた。また青年学校出の国語講習所の教員もいたが、中には「台南師範」出の男教員もいた。生徒は1学年2学級あり生徒は各80名位いた。

担任は男組は女教員、女組は男教員が担任した。国語講習所の専任が休むと中畑が代わりに夜自転車で出かけたが、校長が送り迎をしてくれた。

中畑には校長が模範授業をしてくれた。「40分の授業の流れ、授業の展開の仕方、オルガンの弾き方、清水豊校長は嘉義郡部では、一番上手な音楽の先生でピアノよりもビオラが上手」であった。

男教員は兵隊に行くが女教員はそれがないために学校運営上貴重であったのであろう。また、同校では、日本人の女教員に対する期待も大であろう。中畑の教員生活の基礎を清水豊校長が培ってくれた。同校は中畑にとっては「師範学校」的な存在であった、という。現在「考えたら一番良い校長」であった。また「一番思い出の深い学校で」約束の1年の離任時には「全校生徒を道路に並べて、見送ってくれた」。

中畑は学務課の手違いで1年間に2校（北港の宮前と新高国民学校）を経て、1943年度から引き揚げまで玉川国民学校に勤務した。

43年度の嘉義市内では、助教の質の向上を目指してか初任者に校内や夏の講習会で研究発表をさせている。東門国民学校の林淑慧が体操の研究授業をした。書写を発表したのは詹雪貞である。夏の講習会でも理科の研究授業や各教科の研究授業で、生徒は他校の生徒を借りて発表した。その時は、校長が発表者を決めたところもあり、所属学校の先生方が協力して教材を集めたと、詹雪貞らは言う。

5　決戦下の学校

戦争で非常事態となり「満州から来た兵隊が嘉義市内の学校を宿舎に南方行きを待機中」であった。学校で夜間に戦意昂揚の映画会があると兵隊は「おしろい」や「お饅頭」等を女教員に振る舞う。教室にも「ピアノ弾かせて」と入ってくる。そこで兵隊と結婚した女教員も何人かいた。

他校の兵士達も「警戒警報が鳴ると玉川（学校）の前（を）みんな車に乗って逃げて行く。兵隊も疎開」した。

このような状況の玉川では、校長室内には神棚の他に金庫には教育勅語を保管していた。校長が教育勅語を持って防空壕に入った。防空壕は畳一畳半位で学校の周りの塀の際にあった。防空壕には生徒は疎開していて、「ほとんど入らなかった」と、中畑はいう。

それが45年4月以降には、欧識（母校玉川に就職）によると、玉川では生徒「全員（が）郊外に疎開」していて「生徒が一人」もいない。教員は「20人余」いた、という。

教員の数も半数となったが、教員も「体護る」ために自主的に疎開したためである。日本人で玉川に残った教員は児玉校長と五十嵐教頭（後述、兵隊に行く）と、大部、本部、岩本と中畑で「校長先生の周りにいた」教員であった。台湾の「年配の先生」や蔡順（敗戦後校長）は「疎開しない」が、嘉義市内が半分焼失後に就職した欧識達は疎開先から玉川に出勤していた。

中畑も校長と五十嵐教頭の三家族が、学校か

ら徒歩30分位の郷里の市会議員の別荘を借用して玉川に通勤した。[38] 玉川では、毎日空襲警報がなると防空壕に避難して解除されると、教員は「やることもないのでお喋り」をして帰宅した、と欧識はいう。[39]

教育どころではない市内の教員は疎開地に派遣した。45年度の途中から敗戦後招集された斗六小学校（12学級）の３名の男教員が帰校する間の補充を、生徒のいない嘉義市内の学校の女教員３名が派遣された。その１人が中畑で１年生を担任した。[40]

6　玉音放送と敗戦後

1）玉音放送

45年８月15日の玉音放送は「直立不動の姿勢」で聞いた。玉川では、欧識達教員は児玉「校長の宿舎の前庭でラジオ」で玉音放送を聞いた。欧は「みんなの気持ちはさまざまでした。台湾人は（台湾光復）だと歓呼の人は沢山でした」と。また、台湾人が「嬉しかった。伸び伸び台湾語がつかえるようになった」人もいるが「日本が負けたことを聞いてびっくりした」。「残念だった」という教員もいた。「日本人の先生は涙を流した」。「学校で急にお互い同士で台湾語をはなせる」。[41]

中畑も疎開先（斗六）で日本人の１年生にも、「負けたのが分かるらし」く「日本がどっか行かなくちゃいけないの」と聞かれた。

斗六の男教員は招集解除により敗戦後学校に戻ったが、１名が「軍刀」を「提げて」出勤した。日本人女教員たちは「戦争に負けたんだからそんな軍刀もうおかしいから、外しなさいよ」って言う一幕もあった。

そこで中畑も斗六から玉川に戻ると児玉校長は「ご苦労さんだったね」と言った。中畑は、玉川を最後まで護るのは男教員たちと思い、疎開をしなかった岩本たちの方が酷かった、と。そこで疎開地には、女教員である中畑は「私が行くよりほかない」と斗六に行ったのである。

2）敗戦後

除隊後の教員や渡台後日が浅い教員達は特に生活に困窮し「米にも困るような状態」になった。教員たちは「着物やあるもの」を売っていた。台湾での生活基盤が確立していた高女出の教員免許を取得していた中畑の母親は、良妻賢母で「恩給」生活も堅実さが功を奏した。また台湾人の「ねいや」が農家で米や卵等「随分貰っていた。それらを教員宿舎の家族に分けていたら『おばさん助けて、おばさん助けて』と教員の奥さんがきた」。見かねて「たいやきみたいの作って売る」ことを提案し、実際に自宅で作ってみせた。それを「売ればその日のお金になるし、みんなでやれば恥ずかしいこと無いのよ。先生してたってもう食べないわけいかない」厳しい生活であった。

その様な教員を台湾人は「1945年10月頃には家財道具を売る日本人教員が帰る」ので「生活のため」に「今まで命令を下したのは昔のこと」と思った。また、学校の教職員会議も台湾語になって、台湾語で教える。それが北京語に変わり、台湾の教員はそれらを前夜に習い、翌日子どもに教えるという大変さはあったが、民族自立の希望を持って、大変さにも喜んで望めた。[42]

担任の子ども達との分かれや引き上げの惨めな姿を子どもに見せたくない。日本人教員の苦悩と子どもの純な情感が痛ましい。

中畑が敗戦で日本に帰国することを子どもに話すと、「私も連れて帰ってくれ、って泣いて泣いて」。引き上げの集結地に「むしろ引いて」、持参した「布団引いて寝た」が、その姿を子どもには見せたくないので話さなかった。そこまで子どもが探してきて「連れてって。連れてって」って。「３日位泣いていた」と。[43]

3）台湾人の寛大さ

教頭の五十嵐は、「1945年３月に軍隊に召集」され敗戦となり、「９月15日除隊」後玉川に「挨拶に行く」と「蔡順」が校長になっていて、五十嵐と「大部先生の二人は引続き当校で勤務」といわれ、２人の教員宿舎の居住が認められた。[44]

また、中畑も同校に勤務している。

東門でも日本人教員が1～2名新体制の学校に残ったが、「慎ましく遠慮していた」。白川では、「いつの間にか日本人の先生はいなかった」。玉川の日本人岩本は敗戦で学校には行かないで肉体労働をしたが、いつの間にか条件の悪いところが日本人になったので止めて、親族の仕事をした。[45]

玉川には1945年「十月半頃、玉川校に中国軍一ヶ師団が進駐」したので、「職員で将校達の慰労会」をした。日本人教員は「末席で肩身狭い思いで座って居た処、師団長が私達を自分の近くに呼んだ。「今回の戦争で日本は負けましたが、日本人は非常に優秀で、近い将来亜細亜の先進国として必ず繁栄するだろう、この二人の先生を決して侮蔑してはいけない」と。五十嵐は「師団長の人柄に頭が下がり、日本人の狭量さが反省された」、と。[46]

台湾の1945年8月15日、日本の敗戦が知らされた日の夕食中、「抗日運動で投獄された」父親が、中学校2年生の戴國煇に向かって、「恩義は1年、怨恨は一生、と人々は言う。悠久な歴史を持つ中華民族の一員として、われわれはその逆を行くべきだろう。日本人への恩義は一生感謝して行くべきだ。特に素晴らしい教師への恩義は忘れてはならない」、という。それを聞いた息子は「抗日運動で投獄されたことのある父の言葉を聞いて、中学2年生の私は、全く複雑な気持ちだった」、と述懐している。[47]

このことは、玉川の五十嵐が聞いた前述の将校の寛大な中華民族の懐の寛さと深さであろう。

嘉義や高雄で日本人教員に対する敗戦後の暴言は聞いていない。

台湾の校長先生は日本人の中畑から見ても「立派な人でした」というが、その選定は言うまでもなく台湾人の手によって実施された。東門の20代の若い頼彰能にも参加が要請され、参加者が真剣に話し合い[48]　筆者から見ると、公平に民主的に台湾の校長選定を行ったと思われる。

Ⅱ　平和国民学校

1　戦時下の師弟の絆

平和国民学校（以下平和と略記）では、師弟関係が濃密で校長は生徒の学習は勿論、中等学校等の入学の奨励やその指導、生活や就職の世話、「結婚問題の配慮」等をした。就職の一つには高等科卒の優秀な卒業生を教員に採用して、検定試験に合格させて正教員としていたが、後に校長となった林守盤（改正名後松林成守）やその教え子張自流がいた。斉藤牧次郎は18年間80余名の日台の教師が不満を一切言わないでよくやった、といっている。

3代校長斉藤牧次郎（1906年8月～1923年10月まで18年間）は卒業生や親たちにも絶大な信頼があった。斉藤の教育信念等は下記の通りである。

「只お勅語の御精神をそのまゝいただき、それに台湾高雄という郷土の特殊性を考慮して、敏捷、忠実、進歩の3項目を校訓として挙げ、指導原理とした（1908年～1923年「作業科」を設置）。また、「同化の根本精神は至情主義の教育を原則とせねばならぬ。至情的実践には必ず至情的反応が現はれ此の事実が反復転廻せられる間に内台一如の紐帯が結んで解かない様になる。…即ち情に始って情に終る間に其の効果を表はす事になると思います。唯私共の遺憾とするのは下級官吏が不謹慎な行動です。本島人中に反発を抱きいる者は皆此の不謹慎に発芽しているのです。故に官に於て此の矛盾を避け教に此情を重んじ相俟って遂ひには同化は口にするには及ばない時機に達する事と思はるゝ」、と。[49]

それらを卒業生の王天賞らは「一視同仁の聖旨を奉体して誠心誠意母校々運の発展や教育の為」につくし同校を「州下有数の模範校」にした。大山正義は斉藤を「統治上の功労者」と述べている。同校は下記のことからも大正新教育が実施されていたのである。「全島に冠たる校風の確立に、校友会の自治的育生に、児童自営

運動会其他凡有画的施設薫化を通じまして自治精神を鼓吹され夙に自治制度の礎地を固め」た、人格者であった、と。[50] 1923年3月の新聞記事では同校の一端を「何事も生徒の自治に任しつゝある点も亦他に余り類がなく卒業式…答辞の如きも生徒間の答辞作成係の手に成った」と報道している。

それから20年後の1941年10月22日に、「斉藤恩師記念事業会」は、平和国民学校に斉藤校長夫妻を招き胸像（「壽像」）の除幕式を挙行した。さらに同会から平和に「斉藤恩師記念文庫」の設置代として1千円の寄付があり、それに斉藤、王天賞、松林成守が各五百円、横山農夫志校長と高瀬重雄は43、44年に書籍を寄贈していた。これら一連の行為を「高雄州教育課」では1942年1月号の『台湾教育』に「高雄に結ぶ師弟の情誼」として掲載している。なお、斉藤恩師記念事業会では、「1944年4月　恩師斉藤先生記念誌」（73頁）を発行（44年7月）しているが、同誌は「警報下」に執筆したと記している。[51]

この時期の同校の実態を管見したい。

1）戦時下の平和国民学校の概観

1943年から44年半ば頃の平和国民学校は、徳永百合子（現長瀬）によると、毎朝の朝礼で毎日五箇条の御誓文を週番の教員が読んだ。校長室やその横の奉安殿に拝礼をして、職員室の教頭がいる入り口で出勤簿に捺印した。

同年の平和は、高等科もあり教員は「42名位」いたが、男教員が招集されていた。担任は毎朝、校長に学級の人数を届けたが、横山校長は「頑張ってください」と声をかけていた。[52]「校長は空襲警報があると奉安殿から教育勅語を一番に抱いて防空壕に入った」。それがない日の毎週木曜日は、4時か4時半になると教員全員40余名でバレーボールを楽しんだ。1944年頃になると軍隊が学校を借用した。海軍があるため敵の飛行機の往来が激しかった。[53]

2　母娘が一緒に教員ー徳永百合子ー

1）教員になって

母親の徳永チキは、単身で1938年頃に訪台し、高雄州鳳山郡林子辺林園公学校の教員であったが、1943年4月から平和に転勤した。娘百合子が42年3月に熊本家政女学校を卒業後熊本市商工会館主催の「実務員養成所」の高等科を修了して、1943年3月に訪台した。母娘は一時期宿舎がなく平和国民学校の校長横山農夫志宅で校長家族と寝食を共にした。娘百合子は横山が台湾銀行高雄支店に推薦し渡台3日目から働いたが、先輩を差し置き重視されたことが申し訳ないし敬語使用の日々で辞職した。その後海軍軍事部の事務が決定した。それを聞いた平和の卜部教頭や教員たちが心配して「男の場所に女が行くのは遺憾」「軍事部なんか遺憾」と。それを契機に平和の教員となった。

百合子は2年生の担任にはなったが、教師として戸惑う。まず、母キチ（師範出）に聞く。百合子は母の指導を担任の子ども達と接してみてはじめて納得し教員として成長していく。

「生徒に接する時には、学級経営案ちゅて、ちゃんと予定表を作ってね。その日にどういう勉強をするか予定を立てて、そして1時間をはじめんと如何。…例えば国語なら、まずは文章を読み切る準備をせんといかん。いろんな新しい字が出たりするからね。…そして最初にどういう文になっているか意味を知って、そして区分けして、今日はここまでの文のなかに新しい字はどういう字か…どういう文章が書いてあるかを覚えさせんと如何」と言われた。百合子は母キチに言われたことは、「生徒に当たってみて、少しずつ納得していった」。

台湾の子どもは、「家庭では全部台湾語を使って」いて「学校にきたら日本語を話す」ので「1年生は台湾語を使っても決して喧しゅうわけ。なぜかちゅと、台湾語で育ってきているのに、小学校1年にきていきなり日本語が使えって言うたっちゃ、そりゃ絶対に出来ないと。1

年生のうちに学校で日本語を習いながらうちに帰ったら台湾語、そして日本語を少しずつ覚えて、2年生になった頃からもう絶対に学校では台湾語を使わない、絶対に日本語で話す」となっていた。[54]

同校に1943年4月～45年8月まで勤務し、45年に学童疎開で莉道の日本人小学校へ行き、3名の生徒に音楽は、軍歌を教えた坂梨文美（旧姓森）は、1年生から日本語のみで教育し台湾語は使わなかった、という同校の1年生の実践等についてみたい。[55]

3　1年生の授業ー坂梨文美ー

平和国民学校の1943年度の1年生は6組あったが、担任は前述の福岡女子師範学校卒の徳永キチ、ベテランの「木村先生、台南師範卒の又吉盛一（元沖縄県浦添市長）、高雄高女卒の森文美、中井文子、李世武たちが1年生の担任であった。[56]

木村先生とは李藩が改姓名していた。李藩は、旗後の生まれで彰化高女卒（第2回生）であった。彰化高女に入学が珍しく近隣の人々が祝福して送り出だし、卒業後は公学校の教員となり「本島人」の信頼が厚く、妹も同校幼稚園の教員であった。長男俊夫は、港小学校に通っていた。[57]

森は自宅から5分の平和の辞令が家族の反対にあう。しかし公医の父親が同校勤務に賛成し教員になれたのである。日本語の分からない1年生の生理現象を若い教員は対処し指導しながら日本語を教えた。

1)「おしっこ」の対処と指導

又吉は、1年生の男の子が授業中に「おしっこ」を失敗すると海に連れて行って、体を洗ってやり汚れたズボンを洗濯して乾かして履かせて家に帰した。その行為を親達は「若い男の先生が洗って洗濯までしてくれた」と言って喜んでくれた、という。[58]

森の学級でも教室で「おしっこ」をすると海に連れて行き体を洗い下履きを「買って」もらえると「翌日3～4人」と増えた。その後「おしっこした人は、海まで洗いにやって乾くまでそのまゝスカート」だけ履いて乾くのを待たせた。

2）日本語の国語指導

新任教員の授業参観に来た視学は、高雄高女出の森の1年生の入学時の授業を見て安心した、というがその指導を見よう。

担任1日目は、黒板に大きく「森先生」「1年6組」と書いた。机、椅子、挨拶を教える。森が教室に入ると生徒たちは「机に腰掛けて、椅子に足あげてわいわいがやがや言っていた、ので暫し呆然とした」。そこで「机の横に立たせて、これが机、これが椅子。お勉強するところには、お尻をつけては駄目」と教える。挨拶の「おはよう」は山と山の間から日の出の絵を黒板に描いて「おはよう」と復唱させた。昼は太陽を丸く描いて「こんにちは」。2日目は、「ちょうだいね」「くださいーお母さんや偉い人にー」「あげる」「日の丸の旗の『赤い、赤い』」は、子どもはすぐに覚えた。挨拶は「おひさま（黒板に絵）を描いて「こんにちは」。「三日月様の絵を描いて『こんばんは』」は、「ば」がいえない。3日目は、「ありがとう（ね）」「ごめんなさい（ね）」。「子どもが興味をもって『手、足、指』を覚えると、子どもは目を指す（教員が）『目』というと、子ども達が『目』」というように教えていく。教員は自分の「鼻」さして「鼻」と発音し子どもが「鼻」と復唱する。海の砂浜で「砂」を拾って「砂」と。子どもはどんどん覚える。「飲む、噛む」や舌を出して『舌』を教える、という指導法であった。

4　軍の勤労奉仕

1）勤労奉仕

5年生女子組の担任となった森は「1学期の半分」と「2学期後半」に軍部の指令で学校宛に「公用」（勤労奉仕）で1週間に2回位作業

をする割り当てが来た。

44年の1・2学期は学校で1時間位勉強してから、旗後の灯台まで徒歩で15分位、そこから軍までくねりくねった階段を登って煉瓦2枚を運ぶ仕事である。生徒は階段の途中に立ってリレー式に煉瓦を「よいっしょ」と次に「よいしゃ」と「手渡す」仕事を「何時間も立って」作業をした。煉瓦は上まで運んで機関銃の銃座を作ったのである。その作業は大変であり1台は畳半畳位の銃座を4～5台作った。

それが45年の3学期には、アメリカの偵察機やB29が学校の上空を行き来しだし、旗後の巡行船「黒潮丸」「鼓山丸」「つばめ丸」に乗って学校に来る子ども達がいなくなって生徒数が減少して作業はできなくなった。

（森文美（現森）は、戦後30数年後に高雄で教え子20名位に会ったが、全員が膝が痛い、というのでサロンパスを生徒に送り、彼女たちは「戦争の犠牲者だ」という。）

2）国民学校令での授業

5年生には時間割はあったが国民学校の教科であり、森も「国語・歴史というように分けないで教え」ていた。「教育勅語」や「菊の御紋章」は「天皇陛下のお家の御紋」「仁徳天皇が民の豊かさ」を話すと「御飯を炊く煙が出たら何で金持ちか」という質問をしてくる。「義経の八艘飛び」や「養老の滝」でも「とんでもない質問がでる」なぜ「滝の水が酒になった」の、と。「生徒たちは」先生に「どれを聞いてやろうかと『先生、ちょっと待ってくれ』という。森は「人に教わるのには『ちょっとまってください』と教えていいなおさせる」。森は子どもが「とんでもないことを考える」と、いいながらそれに応えた学習は、現在も印象に残っている。

生徒の「ダジズデド」の濁音が発音できるようにするために森は、自ら作詞作曲した歌を作って教えた。「工場だ　機関だ　鉄だよ　音だよ　どどどん　どどどん　ピストン　腕だよ…」と。子ども達は喜んでうったていた。

担任の子どもに「毎日弁当がない子がいたのでパンを食べさせていた」が、その子に森は「分からないように週2回弁当を忘れた」と言って自宅に取りにやると「まだ弁当忘れたか、森先生忘れんぼ」といって、2個の弁当をもって嬉しそうに帰ってきた。

森の指導は戦時期でありながら、子ども達の実態に配慮して興味・関心を持たせ、子どもが伸び伸び意欲的になる配慮がされている。その実践は師範学校で学んでいないために、型にはまらない柔軟性に富んだ独創的な指導の一つの典型であろう。

5　疎開と引き揚げ

しかし森は1945年8月15日の半年位前から莉道の日本人の小学校に勤務したが、同校は生徒が8名、教員が3名の疎開地であった。3名の生徒には、音楽は「勝ってくるぞと勇ましく…」と教えた。

日本に引き揚げる前に平和国民学校を「渡部と2人で見に行ったが、そこには焼け残った校舎はあったが、呆然として泣いていた」と。[59]

おわりに

学校では、日本人の中学校卒で台湾で師範教育を受けた教員や「内地」から出向した教員達は、台湾生まれの「湾生」を低くみている。また「湾生」が、台湾人に対する差別感情がなかった岩本は、施設設備等の管理補修を彼は「雑用」というが、それを一手に引き受け毎日10年間勤勉に継続した。また、岩本は子どもとの遊びを基底に据えて、子どもが学校に興味や関心をもち、学習を意欲的になれるようにして、異民族の日本人の教員が身近な存在となり、学校生活の中で、日本語の必要性を体得するまで「待つ」ことによって、日本語の習得と言語を発することを促す教育法である。

中畑は、学校を護るのは、日本人の男教員で

あるから、女性の中畑が疎開地に派遣されるのは当然、と思い出向いている。

玉川の女教員は、日本人と台湾人をこえた低学年としてのグループができていた。私生活の交流まであった。しかし低学年の日本人女教員が転任してきた高学年の日本人女教員に対し、学内の秩序を護るよう抗議する。そのグループをうらやむ時間もなく、高学年の担任で進学希望を叶えるために空襲警報解除後や夜間に帰宅した子ども達を集め指導していた。その成果は玉川始まって以来の快挙となった。

教員の家族の協力と援助も大きい。中畑の進学指導や岩本の警察に貰い下げ時、徳永の母の娘への教授法の指導、坂梨の欠食児童への配慮等である。

教員が自主的に疎開してしまった学校を護った教員達は、玉川では引き上げ後、各県で教員となった。しかし玉川の女教員は中畑のみであった。平和では徳永キチは教員を辞め、娘百合子は一時期教員になったが辞めた。高梨は辞めたままである。

日本人の教員は「芝山巖精神のもと一視同仁の方針で内・台の別なく教育に専念」した教員が引き揚げ時に「教え子が基隆」等まで送ってくれ再会を約し、実現した事例は枚挙に暇がない。[60] 中畑は日本に「連れて行って」を振り切っての別れが、戦後再会して進学者やその数も分かったのである。岩本、坂梨、長瀬達も日台の交流を重ねていた（いる）。

台湾での教員が他の教員をどう見ていたのか平和の教員の声を聞こう。「台湾の師範出の先生方は、真面目で責任感が強く、何をやらせてもまかせられました。女教員も同じ、女学校での代用教員は師範出と比べるとおちるところがありました。内地の師範出の先生方には、出稼ぎという感じのする者も少しはあったようです。不愉快だった」、と。[61]

高雄第一学校から平和に6年半（1938～44年9月）勤務した勝呂秀雄と1941年3月まで5年間勤務した三浦定雄は、台湾での植民地教育について「日本人を育てるのだという心構えで…厳しく躾けた」。三浦は戦後「台湾の人たちにすまないことだったと思い…。しかし自分の全力をつくして教育に当りました。そのためか、今も温かい師弟の交流は続いていますし、教え子達は立派に台湾の発展に尽しています。当時の教育がなかったら、現在の台湾の発展が築けたか疑問に思います。この基礎に立って、今後の台湾の人たちの力で立派に築いていくことでしょう」、という。[62]

空襲警報のなか執筆した斉藤牧次郎を讃える記念誌が発行されたが、日台の師弟愛の象徴であり、同地域には台湾の土になった教員達の墓を建て、台湾人が今も護り管理をしている。

註

本論は、「平成18年度埼玉大学総合研究機構研究プロジェクト（研究経費）の補助を受けた。

この論文作成では、特に頼彰能先生、佐藤玉枝先生と玉川会、故新田利夫先生と一公会にご教示戴きました。また下記の方にもお世話になりました。

山本禮子、呉文星、翁麗芳、岩本文治、岩崎澄江、高梨文美、長瀬百合子、王天賞、藩南徳、故張自流、張瑞妍、黄金山、李教、林淑慧、洪清蘭、鄭春葉、詹雪貞、欧識、林水蓮

1：五十嵐千代次「祝辞」『嘉義市崇文国民小学慶祝　創校九十年周年』1988（民国77）年　4頁

2：玉川公学校・国民学校では嘉義高女の教育実習生も含め台湾の教師や卒業生と1979年に親睦旅行（谷河原）から毎年継続し1995年（奈良・京都）まで、参加者の手記を発行している。その間2度訪台（1983年と92年）し玉川会を作り文集等は国会図書館に寄贈している。現在、佐藤玉枝が玉川公学校の枠を越え嘉義市在住の嘉義高女や嘉義中学校の卒業生たちとも手紙や電話等で書物や情報交換中である。一公会は日本と高雄にある。日本の一公会の

開催は1976年の第一回開催（三重県長島温泉）から1998年（福岡海の中道ホテル）を最後に23年間継続したが高齢化で組織は解散し個々の日台交流となっていた。1980年には「母校訪問」を契機に日台合同一公会を14回開催している。新田利夫談―1996年10月28日―。「一公会」1998年11月6日　№23　裏表紙。

平和公学校では、台湾の同校卒業生たちが同窓会を組織し冊子を発行している。平和国民学校は、実質的な推進者であった日本の新田利夫や台湾の張自流らが2005年に故人となった。

玉川会では、「第15回玉川会親睦の旅　京都奈良と花の吉野へ」1995年4月17日より19日

3：「皇国精神の透徹」には、「尊皇の大義浸透」「敬神の本義徹底」「滅私奉公の精神振起」「国語愛護常用の徹底」である。2の「戦時意誠の徹底」には「時局認識の徹底」「国民防空の徹底」「国民防諜の徹底」「軍事援護の強化」である。3の「興亜生活の推進」では「重要物資の増産」「戦時道徳の確立」「無駄の排除」「物資の活用」「貯蓄の励行」「国債の消化」「生活規律の粛正「明朗剛健なる風潮の作興」「国民体位の向上」「集団勤労奉仕の拡充」が挙げられている。台湾総督府国民精神総動員本部「国民精神総動員実践項目竝に徹底方策」『台湾教育』1940年8月457号　95～99頁

4：会期は第1、第2共69日間：（7月22日～9月28日、7月29日～10月5日　於台北帝国大学）である。「昭和15年度　国民精神文化講習会」『台湾教育』1940年8月号　第457号　91頁

5：「新体制と教育」『台湾教育』1940年9月号第458号　1～2頁

6：宣言　教育に関する勅語渙発五十年を記念し紀元二千六百年を奉祝するに当り、我等は高度国防国家を建設し八紘一宇の大理想を現するため益々国体を明瞭にし国民精神の振作昂揚を図り、以て教育報国の実を挙げんことを期す右宣言す

昭和十五年十月三十一日　台湾全島教育者大会

決　議

1、我等は渾身の力を竭して教育に関する勅語の御趣旨を徹底せしめ、国民精神の振作昂揚を図らんことを期す　1、我等は大いに教学を刷新し、特に大国民としての雄渾なる気魄、強靱なる身体、精緻なる科学精神を養成し、以て高度国防国家建設の趣旨に副はんことを期す　1、我等は現下の時局に対応し、愈々覚悟を固くして職分奉公の実を挙げ以て臣道の実践に遺憾なからんことを期す

右決議す　昭和十五年十月三十一日

「台湾教育会主催の教育勅語渙発五十年記念紀元二千六百年奉祝　全島教育者大会」『台湾教育』1940年12月号　第461号　7～9頁

7：「全島教育者大会における文政局の諮問事項に対する答申書（続）」『台湾教育』1941年1月第462号　87～90頁

8：「昭和15年度　国民学校制度講習会」『台湾教育』1940年9月号　第458号　91頁

9：佐藤源治「国民学校教育の根本原理」『台湾教育』1942年1月　第474号　8～9頁

10：佐藤源治『台湾教育の進展』台湾出版文化株式会社　1943年　アジア学叢書　58　大空社1998年　134頁

11：「第8章＜座談会＞「台南師範」を語る」台南師範学校同窓会校史編集委員会『ああわが母校台南師範　台湾総督府台南師範学校史』台南師範学校同窓会　1980年　366頁

12：10に同じ

13：島田初恵「私たちの2年間」台湾総督府台北第一師範学校同窓会『芝山会会報』第10号1999年　92～93頁

14：「国民学校教員補充案成る　本年度千八百名を増加」『台湾教育』1942年4月号　第477号85頁

15：「台湾総督府委託臨時教員養成講習会」『台湾教育』1941年11月号　第472号　92頁

16：『台湾教育』1939年7月号　第444号　102～104頁、「小公学校教員資格講習会」『台湾教育』1940年8月号　第457号　91頁

17：「事変と教育者」『台湾教育』1939年7月号第444号　2頁

18：『台湾教育』1939年7月号　第444号　102～104頁

19：坂梨文美（旧姓　森）に2006年12月10日聞き書き

20：黄金山より2007年1月22日付筆者宛私信、詹

雪貞より2007年２月23日付筆者宛私信
21：南進「暑中雑感」『台湾教育』1940年８月　第457号　93頁
22：『1944年１月１日現在台湾総督府及所属官署職員録』中玉川国民学校は647頁、平和国民学校は717頁
23：岩本文治より2006年12月11日聞き書き
24：岩崎澄江より2006年12月５日聞き書き
25：23に同じ
26：23に同じ
27：拙論「植民地台湾の女教員史（６）」埼玉大学教育学部紀要　2006年９月　第55巻第２号　62頁
28：1943年３月まで玉川の教員であった中畑澄江の姉
29：23に同じ
30：24に同じ
31：23に同じ
32：佐藤玉枝「『女演』バンザイ」13に同じ　122頁
33：岩本は、戦後熊本県で教員になったが、音楽の指導に定評があり、県の指導室や音楽研究会からも、合唱隊が出来ると音楽指導を讃えられた。
34：23に同じ
35：24に同じ
36：頼彰能より新井宛2007年３月７日付私信はじめ聞き書き多数
37：李教、林淑慧、洪清蘭らに2006年12月29日聞き書きと３名の書簡
38：24に同じ
39：欧識より筆者宛2007年１月３日付私信
40：24に同じ
41：39に同じ
42：嘉義市皇爵大飯店にて2006年12月29日聞き書き
43：24に同じ
44：１に同じ
45：23に同じ
46：１に同じ
47：戴國煇「あの日、私は、、、②」『三省堂　ぶっくれっと』1991年No.90
48：36に同じ
49：「斉藤高雄第一公学校長談る同化の根本精神は『至情に在る』と教壇を退いた」（1923年10月10日台湾日々新報掲載）斉藤恩師記念事業会『昭和19年４月　恩師斉藤先生記念誌』1944年７月　55頁
50：大山正義「感謝の辞」49に同じ　39頁
51：「人情美の流露　来賓をして泣かしめた　高雄公学校卒業式」（1923年３月18日台湾日々新報）49に同じ　52頁　３～４頁　18～19頁
52：長瀬百合子（旧姓　徳永）より2006年12月10日　聞き書き
53：19に同じ
54：52に同じ。母親の徳永キチは福岡県女子師範学校卒業後大津国民学校（熊本県）で10年間勤務し肺浸潤になり、姪の勧め（食べ物や気候のよさ）で渡台した。
55：19に同じ
56：19に同じ
57：李藩は、日本の大学出と結婚した。長男の俊夫から1996年８月　高雄にて聞き書き（現アメリカ在住）
58：又吉盛一より1996年10月28日、横浜（ホリデイン。横浜）にて聞き書き
59：19に同じ
60：台湾総統府台北第一師範学校同窓会『芝山』第10号　1999年
61：新井淑子「植民地台湾における高等女学校出身の女教師の実態と意識―アンケートとインタビュー調査資料―」1998年　209頁
62：61に同じ　206頁

（2007年３月30日提出）
（2007年４月20日受理）